

研究・調査報告書

報告書番号	担当
143	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名（原題／訳）	
Drinking frequency as a brief screen for adolescent alcohol problems. 青年期のアルコール問題の簡単なスクリーニングとしての飲酒頻度	
執筆者	
Chung T, Smith GT, Donovan JE, Windle M, Faden VB, Chen CM, Martin CS.	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
Pediatrics. 2012 Feb;129(2):205-12.	
キーワード	
青年期、アルコールのスクリーニング、アルコール使用	
要 旨	
<p>目的： 小児科では、青年期のルーチンのアルコールスクリーニングが推奨されており、これは、飲酒に基づいた経験的に非常に簡潔な妥当性のあるアルコールスクリーニングにより促進されうる。この研究では、若者のアルコールに関連した問題を見出すために、3つの飲酒の項目（すなわち、昨年度の飲酒頻度、1回飲酒量、時々ある過剰飲酒の頻度）によるスクリーニングの精度を調べるための全国のサンプルデータを使用した。</p> <p>方法： 2000年から2007年までのthe annual National Survey on Drug Use and Healthに参加した12歳から18歳までの若者からのデータを使用した。3つの飲酒の項目から成るスクリーニングの精度が、年齢、性別ごとに2つのアウトカムに対して試された。2つのアウトカムとは、Diagnostic and Statistical Manual, Fourth Edition(DAM-IV)のアルコール使用障害の徴候（中等度リスクアウトカム）と、DSM-IVのアルコール依存性（高度リスクアウトカム）の診断である。</p> <p>結果： この2つのアウトカムの存在率は年齢とともに増加した。アルコール使用障害の徴候は1.4%から29.2%、アルコール依存性は0.2%から5.3%の範囲であった。1回飲酒量や時々ある過剰飲酒の頻度に比べて、飲酒頻度はどちらのアウトカムを明らかにするのにおいても高い感度と特異度を有した。この結果は、どちらのアウトカムについても同じ年齢の男性と女性の飲酒頻度の同等のカットオフ値の有用性を示唆した。しかし、年齢特異的なカットオフ値は、中等度および高度リスクアウトカムどちらでもスクリーニングの性能を最大にするために推奨される。</p> <p>結論： 経験的に行われてきた簡潔なスクリーニングである飲酒頻度により、アルコール関連で問題のある若者を効率よく見つけ出すことができることが明らかになった。</p>	